

古代 尾道六郎～伝説と史実の狭間で

市制施行100周年の折（平成10年）、全国から「尾道さん」の募集が実施され、長崎や京都を始め、各地に尾道姓の方がおられる事が分かった。地名から発祥する姓氏はよくある事で（一例…毛利氏は相模国愛甲郡毛利庄の地名に起こる）、何も珍しい話ではない。しかし、それがここ尾道の名を以て姓とするというのだから、地元的には大変興味ある話になって来る。

尾道を姓とする方は、今日の当地方では一人も見られない。が、郷土史をめくれば、平安時代の末期に尾道さんが登場する。尾道史上ミステリアスな存在となっている、尾道六郎その人である。

中央政権を牛耳った藤原氏を中心とした貴族に、東西から反乱の狼煙が上がる。東は関東の平将門、西は伊予の藤原純友、世に言う承平天慶の乱。その時、純友が味方につけたのが、瀬戸内の海を駆ける海人衆（悪党として見られた場合は海賊）達であった。

この『前太平記』（天和元年・1681頃成立）が記すところによれば、伊予からは沢太郎に今治六郎、讃岐から新宮滝夜叉、安芸では金剛十郎、そして備後尾道の六郎といった海人衆が純友の下に馳せ参じた。

尾道六郎について、これまでの郷土史では足利尊氏らと同列に扱われ、詳しい素性は分からないけれども、実在の人物であるとの見解で占められていた。しかしこれに学術的なメスが入ると、尾道六郎の存在は否定されている。あくまでも『前太平記』による創作で、架空の人物であるというわけだ。

長江の磯辺に船を寄せたという菅原道真に同じく、こういう逸話は近世以降、文人や知識人の手によって創り上げられるものであり、尾道六郎もその一例であろうというのが、学術的な観点からの答えである。

尾道六郎を名乗る人物はその当時実在しなかったにしても、尾道周辺海域からも純友の挙兵に従った海人衆は間違いなく存在したはずである。それら海人衆の存在が、幻の人物・尾道六郎を形作っているのではあるまいか。それはまた、毛利や小早川らに従い、海の勢力を形成した水軍達の先駆けであったとも言えるかもしれない。

尾道さんが寄り集まっていた肥前大村藩（長崎県大村市）の藩主・大村氏が、藤原純友の末裔を称しているのは、いささか興味深い話である。